

外国人日本語学習者の文法的予測力をどう育てるか ——初級段階の学習者に向けて——

市川保子

1. 寺村秀夫(1987)と市川(1993)の研究

寺村(1987: 56)は日本人の文法的予測能力についての調査の中で、ネイティブスピーカーというものが「驚くほどの正確さで、しかも、かなり先まで現れそうな語(の連なり)を予知するものだ」と指摘している。

一方、寺村の予測調査を外国人学習者に行った市川(1993: 4)は、「外国人は新しく与えられた語にのみ注意が行き、今までの語・文の流れを忘れて、その後との関係だけで文のつづきを予測しようとする」と述べている。

本小論は、日本語学習に必要と考えられる予測力について、寺村(1987)と市川(1993)の調査結果を中心に、外国人学習者が文法的予測力を得るためにはどのような指導が必要かを、具体的な練習問題を通して提案する。

1.1 寺村(1987)の研究(日本人ネイティブに対する調査)

寺村は、被験者である43人の日本人学生に、夏目漱石の『こころ』の1文を文節ごとに与え、各自に後続文を考えさせた。寺村が用いた文は次のようであった。

「その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けえもらえと勧める人であった。」(夏目漱石『こころ』)

寺村はまず、文頭の「その先生は」を与え、学生にそれに続く文を各自で考え、文を完成させるように指示した。学生が(1)の文を完成させると、文節を一つずつ増やした(2)「その先生は私に」、(3)「その先生は私に国へ」を与え、同じように文を完成するように指示した。

(調査は(4)以降も続くが、ここでは(3)までを示す。)

(1) その先生は_____。

(2) その先生は私に_____。

(3) その先生は私に国へ_____。

被験者43人の完成した後続文を分類すると、(1)において動詞で終わるもの(動詞文)が60%、「名詞+だ」で終わるもの(名詞文)が21%、形容詞で終わるもの(形容詞文)が19%であった。内容的に

は、「その先生」の特徴づけや、具体的な動作、習慣的・一般的動作、一回きりの動作など、表されているものは多岐にわたる。また、時間的なものも過去と非過去（現在・未来）両方が表れていた。

次に、「私に」の加わった(2)では、後続文に表れる述語（動詞）に明らかな傾向が表れ始めた。47%の被験者が「言う」、また、「要求する・頼む」などの「求める類」を用い、44%が「あげる・もらう・くれる」などの「くれる・与える類」を用い、両者だけで88%を占めていた。

そして、「国へ」が加わった(3)では、被験者の80%が動詞「帰る」を用いて、「帰る＋ように＋言った」の形をとっている者が多く(96%)見られた。

1.2 市川(1993)の研究 (外国人日本語学習者に対する調査)

市川(1993)は寺村と同じ調査問題と方法を用いて、外国人学習者の予測力はどのようなものであるかの調査を行った。寺村調査の(1)～(3)は、外国人学習者では次のようになった。

(1) 「名詞＋だ」30% 「動詞」27% 「形容詞」33%

日本人ネイティブでは動詞を用いている者が圧倒的に多かったが、外国人学習者では形容詞、名詞＋だ、動詞がほぼ3分の1ずつを占めた。

(2) 「言う」と、「要求する・頼む」などの「求める類」 6%
「あげる・もらう・くれる」などの「くれる・与える類」 53%
その他 41%

日本人ネイティブでは「言う」「求める類」と「くれる類」が47%と44%であったが、外国人学習者では「くれる類」が53%を占め、「言う」「求める類」は6%しかなかった。また、その他（他の異なった動詞を用いる）においては、日本人は19%なのに対し、外国人学習者では41%もあった。日本人が「先生は私に」と聞いただけで、「言う」「頼む」「くれる」などに収束されていくのに対し、学習者は「くれる類」にのみ収束され、それ以外はいろいろにばらついているのがわかる。

(3) 「言う」54% 「くれる・与える類」 9% 「使役」19%

(2)ではほとんど現れなかった「～と言う」が(3)になって54%に上った。使役には「行かせた」「帰らせた」などがあり、使役を含め、その他の動詞、無答などのばらつきが依然多く見られた。市川の調査をまとめると次のようになる。

- 1) 外国人学習者の予測の仕方は、与えられた語句を受ける述語の言語形式においてばらつきが大きい。
(1) では、日本人ネイティブの60%においてすでに動詞文への収束が見られたのに対し、学習者にはそのような収束はなく、動詞、名詞+だ、形容詞それぞれが30%ずつ表れている。
- 2) 外国人学習者は新しく与えられた語にのみ注意が行き、今までの語・文の流れを忘れて、その語との関係だけで文のつづきを予測しようとする。
(3) において、「国へ」を与えられた日本人ネイティブはほとんど(80%)が「国へ」と結び付く「帰る」を用いたが、それにとどまらずに「その先生は私に」という流れの中での「国へ」であることを意識し、96%が「帰るように言った」の形を取っていた。それに比べて、外国人学習者は「国へ」が与えられると、すぐ「帰る」を思い付き、そこまでは日本人と同じだが、その前の「その先生は私に」を忘れてしまい、「国へ帰りました」「国へ帰ります」などと続けてしまう傾向が見られた。
- 3) 外国人学習者の同一の言語形式に収束していく速度は日本人より遅く、日本人より1段階ぐらいあとになって(日本人より1語句多く得て)日本人ネイティブ型の予測に近づく。
- 4) 「先送り(その時点で判断や処理をしないで、先に延ばすこと)」は日本人同様できるが、日本人がほぼ全員に先送り傾向がみられるのに対し、外国人学習者は約半数に限られ、残りの者は語句を得るごとにそれに続く述語の言語形式が変わる。
- 5) 予測文に使用された語句・表現については、日本人は与えられた語句にあまり支配を受けずに多彩で自由な文が作れるが、外国人学習者は、与えられた語句にとらわれ、予測文の表現内容が乏しい。

2. 予測力をつける指導と練習

寺村、市川の調査に続いて、「予測」に対する研究は積み重ねられ、市川と同様の、大野他(1996)による外国人学習者に対する文法的予測力調査、酒井(1995)、津留崎(1997)による「後続文完成課題」を用いたの予測能力調査、杉山(1997)、石黒(1998)(2008)⁽¹⁾などの文章理解過程の観点からなされた予測研究、福田他(2007)による聴解における予測調査なども行われてきた。

しかし、これらの研究は、対象が日本人ネイティブであれ外国人学習者であれ、彼らがどのような予測能力を持っているか、また、どのように予測を行っているかの分析・調査の研究が主たるものであった。

市川(1993: 17)は外国人学習者の文法的予測能力の養成について次のように提言している。

…予測能力とは、一つ一つの軸に支配されることなく、単独の、また複数の言語要素から、文全体を見通す能力であると言えることができる。これらの予測に必要とされる能力は、日本人が長期にわたって積み上げて身につけている、そして外国人が身につけるためには時

間のかかるであろう文法的、語彙的知識が多い。(中略)

文全体を見通す文法能力(社会通念、常識、文化知識も含めて)は、ある程度の日本語力が備わって築かれる総合的な力であると同時に、日本語力養成の初期の段階から方向付けをなされるべきであろう。

ボトム・アップ、トップ・ダウンということが言われるが、文法的知識の教授にも従来のボトム・アップ(部分から全体への積み上げ)方式に加えて、トップ・ダウン方式とでもいべき、全体を見通す能力を養う教授法の開発が急がれる。

現在日本語教育において、部分的に予測を取り入れた教材、指導が考えられているようであるが⁽²⁾、まだ十分とは言えない。次節では、文法的予測について、初級段階の学習者に対する具体的な練習法のいくつかを提案をする。

2.1 助詞について

本節では、外国人学習者が文法的予測力を身につけるために、初期の段階からどのような指導を行えばいいかを考える。「助詞」の中の「格助詞」「は・が」と、「構文」に絞って⁽³⁾、具体的に練習問題を提示していく。

2.1.1 格助詞

格助詞は述語、特に動詞との結び付きが強く、ある動詞は決まった格助詞しかとらない場合もある。「あげる・やる」「着く・付く」「会う」が帰着点に「に」をとるのもその一例である。したがって、ネイティブは名詞句(名詞+格助詞)が提示されると、あとに来る述語を予測しやすいということになる。また、「は・が」については、それぞれが持つ機能的、意味的特徴が、あとに続く文を予測しやすくしているという面を持っており、ここでは格助詞と「は・が」を中心に考える。

日本語教育で格助詞の練習は、次のような「穴埋め」問題が従来から採用されている。

- 1) きのう公園 () 友達とバトミントンをした。
- 2) きのう公園 () 友達とバトミントン () した。
- 3) きのう公園 () 友達 () バトミントン () した。

従来型の穴埋め問題は、格助詞の問題として作りやすく、採点しやすく、また、学習者にもわかりやすいものである。今後もずっと採用され続けるであろう問題形式である。一方で、予測力を促進する方法として、教師が文の前半を言い、後半を学習者に作らせる練習が考えられる。

(これ以降の練習問題の答えについては、必要に応じて答えを載せている場合と、そうでない場合があるので、了承願いたい。)

【練習1】 前半を聞いて（読んで）文を完成しなさい。（市川(2005:32)より）

- 1) アイスクリームを_____。
- 2) ナイフで_____。
- 3) 友達と公園を_____。
- 4) 友達と公園で_____。
- 5) 友達に本を_____。
- 6) 友達からお金を_____。
- 7) 友達は私に_____。
- 8) 友達は私に学校へ_____。
- 9) 友達は私にバイトを_____。

「前半を聞かせて」後半を作文させる場合は、格助詞をあまり強調して発音しないで、自然なイントネーションで言うようにする。

次は外国人学習者が間違いやすい格助詞「に」と「で」の練習である。練習方法は練習1と同じである。

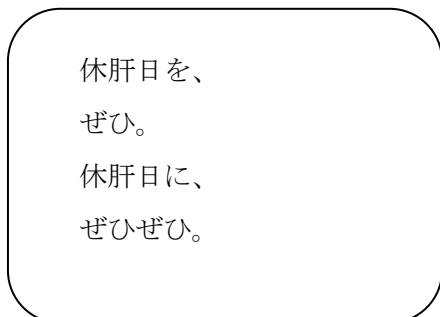
【練習2】 前半を聞いて（読んで）文を完成しなさい。

- 1) a. 部屋の中に_____。
b. 部屋の中で_____。
- 2) a. ここで_____もいいですか。
b. ここに_____もいいですか。
- 3) a. この学校には_____。
b. この学校では_____。
- 4) a. バンコクには_____。
b. バンコクでは_____。

次はやや応用的な格助詞の問題である。車内や雑誌などの広告には、次のような述語を省略した広告文が見られる。できれば実際にある／あったものを取り上げ、学習者に述語を想像（予測）させる。

【練習3】次は（ ）の広告です。省略されている述語部分にどのような表現が来るか考えなさい。また、これは何の広告か（ ）の中に書きなさい。

1) () の広告



2) () の広告

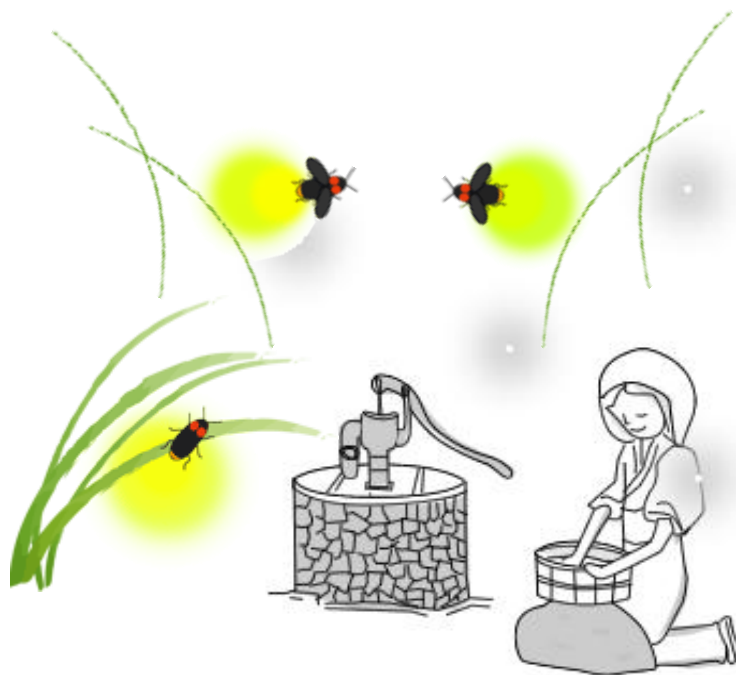
- (1) 40億個のビフィズス生菌を1カプセルに。
- (2) 1カプセルに生きたままのビフィズス菌が。

1)は「ノンアルコールビール」の広告である。「休肝日を、ぜひ」の後ろには「作ってください／持ってください」、「休肝日にぜひ」の後ろには「(ノンアルコールビールを)飲んでください」が省略されている。2)は「ヨーグルト」の広告である。(1)は「詰めている／入れている」、(2)「詰まっている／入っている」が省略されている。

次は3つの俳句を読んで、どのように情景が異なるかを説明する問題である。3つの俳句は格助詞のみが異なっている。それぞれの格助詞からどのような述語が予測されるかを問う問題とも言える。

【練習4】俳句 a b c を読んで、どんな情景であるか説明しなさい⁽⁴⁾。

- a. 米洗う前を蛍がふたつみつ
- b. 米洗う前に蛍がふたつみつ
- c. 米洗う前で蛍がふたつみつ



aは、格助詞の「を」が「道を歩く／渡る」のように移動や通過点を表すことから、「前を蛍が勢いよく飛んでいく」様子を示し、bは「に」が存在の場所を表すことから、「前に蛍が止まっている」ことを、cは「で」が動作の場所を示すところから、「前で蛍が舞っている／遊んでいる」様子を表していると考えられる。

2.1.2 「は」と「が」

「は」と「が」の使い分けも予測の指標として利用することができる。「が」は現象描写文で多く用いられ、「は」は「判断文」で用いられることが多い。

本小論では、「現象描写文」を、(1)～(3)のように「実際に起きた現象、今ある現象、あるいは習慣的に起る現象」を描写する文とする⁽⁵⁾。

- (1) 雨が降ったために、地面が濡れている。
- (2) このボタンを押すと切符が出る。
- (3) よく勉強したにもかかわらず、試験に落ちた。

一方、「判断文」というのは、(4)～(6)のように「話者の判断を表す」文を指し、「義務、免除、許可、推測、後悔、感情、願望、意思、警告」などを表す文が含まれる。

- (4) 午後は暑くなるので、泳ぎに行くつもりだ。
- (5) 宿題を出せば、掃除をしなくてもよい。
- (6) けがをしたが、試合に出場したい。

「働きかけ」の文は(7)～(9)のように「話者から相手への働きかけ」を表す文である。

- (7) 暗くなったから帰ろう。
- (8) 仕事が終わったら、はやく帰りなさい。
- (9) 勉強しているのに邪魔するな。

「あそこに猫がいる。あ、あの猫はこの辺をうろうろしているノラ猫だ。あっちへ行け。」という発話を例にとってみよう。

この発話において話し手は、まず猫がいることを「が」を用いて描写し、そして次の文で、その猫がどんな猫であるかを判断し、説明している。そして、「あっちへ行け」で発話を終えている。1文目の「あそこに猫がいる」が現象描写文であり、2文目の「あの猫は・・・ノラ猫だ」が判断文、最後の「あっちへ行け」が働きかけ文になる。

次の練習は、現象描写文の「が」と判断文の「は」を用いた予測練習である。

【練習5】□の中から一つ選び、文を完成しなさい。()の中に「は」か「が」のうち、適切なほうを選びなさい。

1)  (6)



- 一人の男 () _____。
- この男 () _____。
- よく見ると、外国人のようだ。
- この家の人 () _____。
- すぐ知らせてあげよう。

- a. 気がついているのだろうか
- b. 垣根を越えようとしている
- c. 誰だろう

() の答え：が、は、は
___ の答え：b, c, a

2)



(6)

A: あそこにごきぶり() _____。

B: 気持ち悪い。早く殺さなければ。

A: ちょっと待って。これ() _____。

B: なーんだ。でも気持ちが悪いから、早く殺して!

a. おもちゃみたいだよ

b. いる

() の答え: が、は

_____ の答え: b, a

「は」は対比文で用いられることが多い。対比文とは、次の(1)のように前文と対照的な事柄を後文で述べる場合である。

(1) 私は魚は食べるが、肉は食べない。

しかし、後文に常に対照的な語が現われるとは限らない。

(2) 私は魚は好きだが、最近あまり食べていない。

(2) では、「魚が好き」であれば頻繁に食べるであろうという推測に対して、「最近あまり食べない」という対比が来ているのである。

【練習6】前半を読み、文を完成しなさい。

1) サッカーは好きだが、テニスは_____。

2) チョコレートは好きだが、今は_____。

3) A: ヨウさんはスポーツはどうですか。

B: 見るのは好きですが、自分でやるのは_____。

複文において従属節の主語は基本的には「が」をとる。従属節の中でも、「～が／けれども、～」「～し (例: 今日は寒いし、もう少し寝ていよう。)」 「～から」などは「は」も「が」もとる。「が」をとるのは、「～とき／たら／ば／と／なら／あとで／てから／ように／ために」のような副詞節、そして、名詞修飾節などである。それらの文で「は」が用いられる場合は、それが従属節内にあ

るように見えても、本来は主節の主語である。

【練習7】主節に当たる文を完成しなさい。そして、主節の主語は誰か(何か)を考えなさい。

1) a. 林さんが帰るとき、_____。

b. 林さんは帰るとき、_____。

答え例：a. 雨が降り出した(主語：雨)

b. いつもスーパーに寄る(主語：林さん)

2) a. アンさんが帰ったあとで、_____。

b. アンさんは帰ったあとで、_____。

答え例：a. 相談しましょう(主語：私達)

b. 夫に相談するでしょう(主語：アンさん)

3) a. 私と友達が住んでいるアパートは_____。

b. 私と友達は住んでいるアパートを_____。

答え例：a. 広くて明るい(主語：アパート)

b. 引っ越す予定だ(主語：私と友達)

2.2 構文について

天野(2011:11)は、「逸脱的特徴を持つ文の意味理解には類推の過程が存在し、その類推の過程に「構文」に関する文法的知識が働いている」と述べている。天野(2011)の説明を日本語教育に応用すると、私達は文法的に変な文(エラーの文)を読んだとき、「構文」に当てはめて想像し、理解しようとすると考えられる⁽⁷⁾。

以下の例は、天野の例と説明を借りて、筆者自身が説明するものである。

?ポンさんは手でたまごをけた。

↓↑

ポンさんは△△で〇〇をけた。

↓↑

ポンさんは足でボールをけた。

私達が「ポンさんは手でたまごをけた」という文を聞いた(見た)とき、何か変だと思う。しかし、私達はその文を不理解文として放棄するのではなく、頭に「～は～で～をけた」という構文を想起し、それと結び付けて「ポンさんは手でたまごをけた」を理解しようとする。本来は「足でける」のに「手でける」としたため、また「たまごをける」ことは通常あまりないこ

とのため、この文が変な文だと解そうとする。天野は人の文理解において、「構文」というものが基底にあり、人はそれに照らして解釈していると説明する。

学習者に構文や文型を習熟させる方法として、いくつかの「名詞+格助詞」を組み合わせ、一つの構文としてとらえさせる方法が考えられる。次は聞き取りと構文・文型を結び付けた練習である。問題は教師、または、テープによって、自然なスピードで読み上げられた文である。

【練習8】文を聞いて、_____に適切な語と助詞を書き入れなさい。

1) 構文1 : ~は ~で ~へ V

- (1) ソイさんはあした新幹線_____九州_____。
- (2) 男はきのう包丁_____手_____。
- (3) 犯人はきのうピストル_____女性_____。

「課題文」

- (1) ソイさんはあした新幹線で九州へ行きます。
- (2) 男はきのう包丁で手を切った。
- (3) 犯人はきのうピストルで女性を殺した。

2) 構文2 : ~は ~に (~を) V

- (1) シリポーンさんは会社_____メール_____。
- (2) 私は先生_____漢字について質問_____。
- (3) 私はきのう日本人の先輩_____タイ語_____。
- (4) 私は友達_____CD_____。
- (5) 私は日本人の友達_____日本語_____。
- (6) 私は田中さん_____仕事_____。
- (7) 私は山田さん_____あした来てください_____。

「課題文」

- (1) シリポーンさんは会社_____にメールを書いた。
- (2) 私は先生_____に漢字について質問をした。
- (3) 私はきのう日本人の先輩_____にタイ語を教えた。
- (4) 私は友達_____にCDをもらった。
- (5) 私は日本人の友達_____に日本語を教えた。
- (6) 私は田中さん_____に仕事を頼みたい。
- (7) 私は山田さん_____にあした来てくださいと言った。

次は文の前半(従属節)を与え、後半を言わせる(書かせる)問題である。条件節「～ないと」は注意や警告に用いられることが多く、それを利用した練習である。

【練習9】注意や警告を与えてください。思いつくことを言って文を完成してください。

- 1) まだぐずぐずしているの。早くしないと、_____。
- 2) もう10時だよ。すぐ行かないと、_____。
- 3) よく似合っているよ。今買わないと、_____。
- 4) また遅刻? 時間を守らないと、_____。
- 5) 買い物に行くの? 細かいお金がないと、_____。
- 6) 携帯持ってる? 携帯がないと、_____。

「答え」(答えの例を示す。同じでなくても、文意が通って、注意・警告になっていればよい。)

- 1) 例: 遅刻するよ、間に合わないよ、置いて(い)かれるよ、もらえないよ
- 2) 例: 閉まっちゃうよ、遅刻するよ、間に合わないよ
- 3) 例: 売り切れちゃうよ、なくなっちゃうよ、
- 4) 例: 嫌われるよ、信用されないよ、もう誘ってもらえないよ
- 5) 例: 困るよ、困るかもしれないよ
- 6) 例: 不便だよ、困るよ

条件節「～ば」は助言に用いられることが多い。次はそれを利用した練習である。

【練習10】助言を与えてください。思いつくことを言ってください。

- 1) A: 切符はどうやって・・・。
B: 切符ですか。このボタンを押せば、_____。
- 2) A: 市役所はどう行ったら・・・。
B: 市役所ですか。この道をまっすぐ行けば、_____。
- 3) A: 水がほしいんですが。
B: 水ですか。あの人に頼めば、_____。
- 4) A: エレベーターは。
B: エレベーターですか。もう少し行けば、_____。
- 5) A: 字が小さくて…。
B: 読めませんか。あその眼鏡を借りれば、_____。

「答え」(答えの例を示す。同じでなくても、文意が通って助言になっていればよい。)

- 1) 例: 出てきますよ、いいですよ
- 2) 例: いいですよ、ありますよ

- 3) 例：持って来てくれますよ
- 4) 例：ありますよ
- 5) 例：大丈夫ですよ、いいですよ

3. おわりに

外国人学習者の文法的予測力を育てるためのいくつかの練習を提案した。しかし、これらはあくまでも初級レベルの文構造をつかみ始めた学習者に対するものである。

予測力を育てるためには、助詞、構文(文型)、語句に加えて、述語との呼応関係を持つ副詞(例：あまり／そんなに／決して～ない、など)、文をつなぐ、また、文頭に立って文の方向を示す副詞句・接続詞(例：しかしながら、第一に／まず、など)、指示語、主節にどのような意味合いの文が来るかが連想できる従属句(例：～のに／くせに／ものの／からには／からこそ、など)、また、名詞句と動詞の一定の結び付きを示すコロケーション(例：薬をのむ、シャツを着る、ズボンをはく)や文脈・談話構造、そして、通念・常識などの文化的な要因なども考えなければならない。

文レベルを超えた文章レベルの予測のための指導・練習作成はなかなか難しい問題であるが、本小論が初歩レベルでの予測力養成への方向付けの一助となれば幸いである。

(本小論は2013年3月に行われた「2012年度第2回日本語教育セミナー」での講演の一部をまとめたものである。)

注

- (1) 石黒(2008)は文章理解過程の予測についての研究を集大成したものである。
- (2) 佐々木瑞枝他(2001)は予測をさせながら聴読解力を養う意図で作られている。
- (3) 予測には「語句」の影響は欠かせないが、本小論では文法的予測に絞って考えるため、「語句」については取り上げない。簡単に触れると、「語句」は、語句の持つ一般的な意味と、社会言語学的意味(待遇の意味)に分かれる。「先生、学生、国」を取り上げると、語句の一般的な意味としては、「先生」とは「何か(学問・技芸)を教える人」と解することができる。「学生」は「学校(特に大学)で学ぶ人」、「国」は「国家、国土、地域」などとなる。我々は「先生」「学生」「国」と聞いたとき、まず基本的意味を考えるが、同時に「先生」であればこうするだろう、こうあるべきだろうというように「先生」の持つ社会的な意味も考える。「学生」であれば「勉強する」「勉強すべきだ」「先生の指示に従うものだ」などと考える。「国」では「故郷」を連想し「なつかしいところ」「帰郷」などを考える。寺村の調査で「その先生は私に国こへ・・・」で被験者のほとんどが「帰る」を予測したのも、「国」＝「故郷」から連想された可能性が高い。
- (4) この練習問題は国際交流基金「日本語教育通信」2011年6月号「文法を楽しく」(市川保子

執筆)より借用した。

(5)角田(2006)は「接連接」、つまり複文の中での現象描写、判断、働きかけを中心に据えているが、筆者は単文レベルでもこの考え方は有効であると考えている。

(6)この2枚の写真はインターネットより借用した。アドレスはie057_055 www.fotosearch.jp、およびhttp://shiwasetime.cocolog-nifty.com/blog/2008/04/post_5285.html。

(7)天野の「構文」は日本語教育で用いる「文型」とほぼ同一と考え、「文型」という語を用いた。

参考文献

- 天野みどり(2011)『日本語構文の意味と類推拡張』笠間書院 pp1-228
- 石黒 圭(1998)「理由の予測—予測の読みの一側面—」『日本語教育』96号
- _____ (2008)『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』、ひつじ書房
- 市川保子(1993)「外国人日本語学習者の予測能力と文法知識」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第8号 pp1-18
- _____ (2005)『初級日本語文法と教え方のポイント』、スリーエーネットワーク pp1-443
- 大野早苗他(1996)「予測文法研究—後続文完成課題から見た日本語母語話者と日本語学習者の予測能力について—」『日本語教育』91号
- 酒井たか子(1995)「文の適切性のための一試案—後続文完成問題における日本人との比較—」『日本語教育論集』第10号 筑波大学留学生センター
- 佐々木瑞枝他(2001)『予測してよむ聴読解—現代日本事情に関する38章(アカデミック・ジャパンーズ日本語表現ハンドブックシリーズ)』、アルク
- 杉山ますよ他「読解における日本語母語話者・日本語学習者の予測能力」『日本語教育』92号
- 寺村秀夫(1987)「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」(『日本語学』Vol.6 No.3 p56-68のちに『寺村秀夫論文集II 言語学・日本語教育編』(1993)に収録)
- 角田三枝(2006)「「接連接とモダリティの階層」とその応用」日本語学 vol.25 No.6 pp30-39
- 津留崎由紀子他(1997)「予測文法研究：後続文完成課題におけるJSLとJFLの予測能力について」『言語文化と日本語教育』13 お茶の水女子大学日本言語文化学会
- 本郷智子(2006)「会話における「たら」と「と」の談話機能」『多摩留学生教育研究論集』第5号 電気通信大学・東京学芸大学・東京農工大学)
- 堀口純子(1973)「英語国民による日本語の四音節名詞のアクセントの予測とその実際」『日本語教育』19号